

第3章 昭和55年度山口大学構内の発掘調査

第1節 吉田構内経済学部校舎新営に伴う試掘調査

1 調査の経過

新営予定地は吉田構内の南端中央部よりやや北側に位置する。西方約50mの地点には弥生時代中期から古墳時代の竪穴住居跡群が検出された「遺跡保存地区」が所在し、新営予定地にも集落関連遺構が分布する可能性が考えられたため試掘調査を実施した。

調査は遺構の有無を確認するために、新営予定地内に幅2mのトレンチを2本設定して行った。構内造成等による埋め土は機械を使用して除去し、それ以下は手掘りによる分層発掘を行った。調査は人文学部考古学研究室の協力を得、昭和55年12月1日から16日まで行った。調査面積は66m²である。

2 調査結果

A トレンチ

新営予定地の南端部付近に、東西方向に設定した幅2m、長さ22mのトレンチ。地表面の標高は東部および中央部で約20.4m、西部で約21.3mで、トレンチ中央部から西側は東側に比べてやや高位に位置する。構内造成による埋め土は層厚約10~40cmで、トレンチ中央部では極めて薄く客土されている。埋め土の下には旧水田耕作土、旧水田床土が残存する。

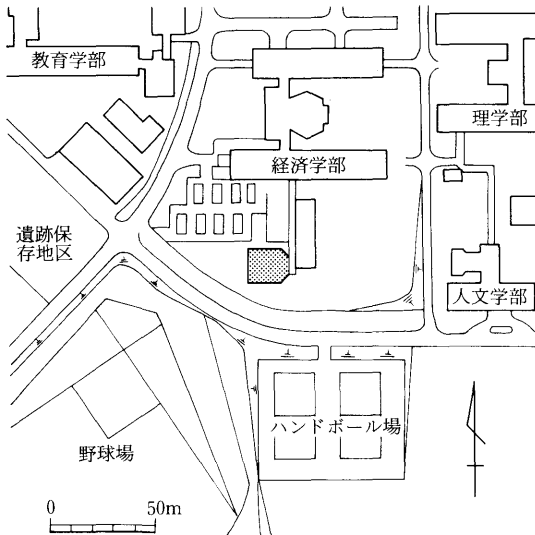


Fig. 63 調査区位置図

その下位には本学統合移転前の水田に伴う暗渠の検出面である層厚10~30cmの第4層：灰色砂質土が堆積する。それ以下は層厚20~40cmにわたって砂、シルト、砂礫が互層をなしてブロック状に堆積し、青灰色粘土の地山へと続く。礫の粒径は3~5mmで、さほど大きくない。第4層以下の堆積層は湧水の激しい自然堆積層で、最下層の第14層：暗茶褐色有機質土は自然木や木葉等の植物遺体を多く含む。地山面の標高はトレンチ東側で約19.4m、中央部で約19.2m、西側で約19.6mで、地山はやや起伏をもっている。

遺構は認められず、遺物も第4層から須恵器、土師器、陶器小片各1点が出土したにすぎない。

Bトレンチ

新営予定地の西側に、Aトレンチと直交して南北方向に設定した幅2m、長さ11mのトレンチ。構内造成等の埋め土は、地表面から約40~100cm下位まで厚く客土されている。その下には旧水田耕作土、旧水田床土が存在するが、旧水田耕作土は南端部で認められるにすぎない。それ以下はAトレンチ同様、湧水の激しい自然堆積層で、層厚20~60cmにわたって砂、シルト、砂礫、粘質土が互層をなして堆積し、灰色粘土の地山に至る。地山面の標高はトレンチ北側で約19.3m、南側で約19.0mで、地山は北から南へ向かってわずかに下降し、南端部ではさらに南東方向に落ち込む。

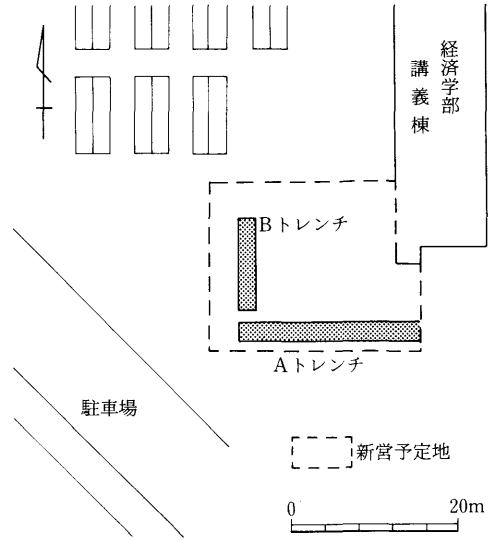


Fig. 64 トレンチ設定図

遺構は認められず、遺物も第9層：灰色砂質土から土師器小片2点が出土したにすぎない。

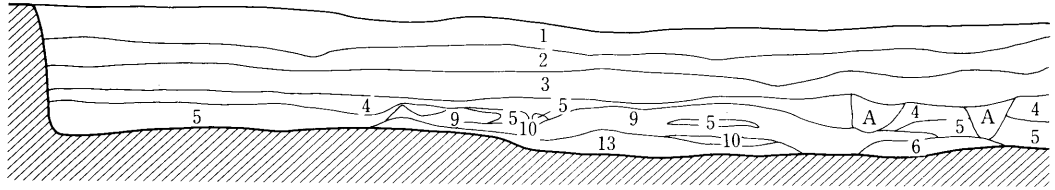
3 小結

新営予定地内では調査当初予想された集落関連遺構は検出できなかった。しかし、当該地域一帯の旧地形を推定する手がかりが得られた。すなわち、地山は灰色および青灰色を呈する強い還元状態の粘土で、今回の調査地域の西方に位置する「遺跡保存地区」での集落遺構の掘り込み面である黄褐色粘質土の地山とは大きく異なっている。また、「遺跡保存地区」での竪穴住居跡等の遺構の検出面の標高は約19.3~19.4m¹⁾で、A・B両トレンチの地山の検出面の標高と大差ない。しかし、竪穴住居跡等の検出面から床面までの深さは、約10~20cmであることから、「遺跡保存地区」の旧地形は現状よりもかなり高位に位置していたことが予想される。また、周辺では今回の調査地域のすぐ北東に位置する経済学部校舎D棟の東側、および南側に位置するハンドボールコート北端部で、黄褐色粘質土の地山が検出されている²⁾。したがって、当該地域はトレンチ内での地山上位の堆積層および出土遺物からも窺えるように、少なくとも弥生~古墳時代にかけては小規模な沼沢地あるいは谷状のやや落ち込んだ地形であったことが推察される。時期差のある遺物の出土は、このような周辺高所からの流れ込みによるものであろう。

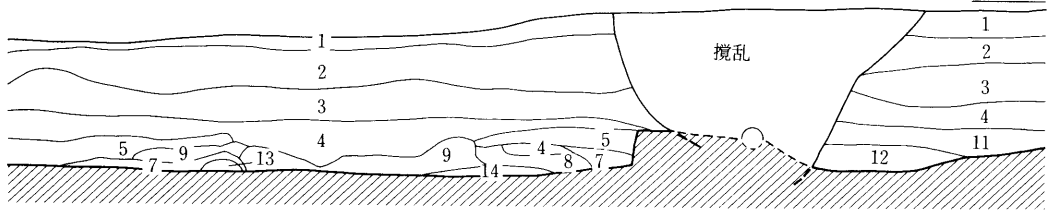
昭和 55 年度山口大学構内の発掘調査

南壁

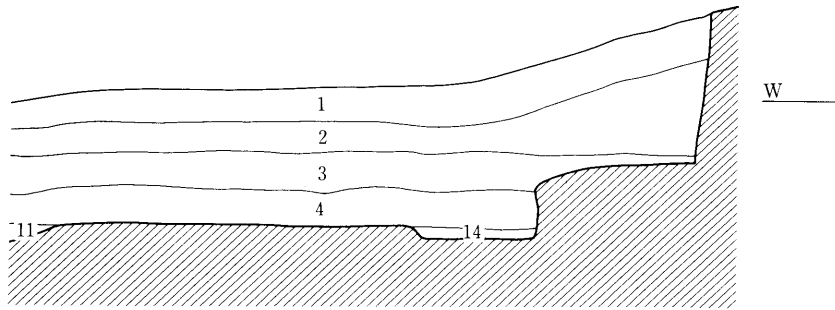
E 20.60m



20.60m



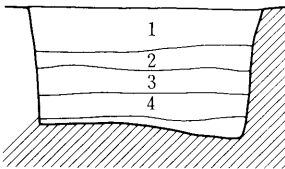
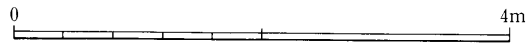
20.60m



東壁

N 20.60m

S



- | | | |
|----------|-----------|-------------|
| 1 表土 | 6 粗砂 | 11 黄褐色シルト |
| 2 旧水田耕作土 | 7 細砂 | 12 黄褐色土 |
| 3 旧水田床土 | 8 微砂 | 13 灰色粘質土 |
| 4 灰色砂質土 | 9 砂礫 | 14 暗茶褐色有機質土 |
| 5 黒色シルト | 10 灰白色シルト | A 暗渠 |

Fig. 65 Aトレンチ土層断面実測図

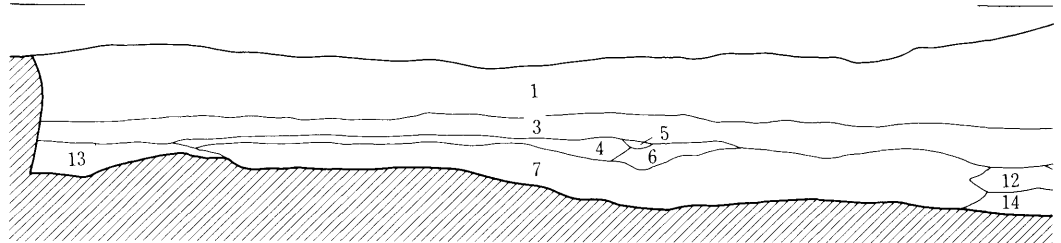
[注]

- 1) a 山口大学埋蔵文化財資料館「吉田構内遺跡保存地区の発掘調査 (昭和57年度)」(『山口大学構内遺跡調査研究年報V』、1986年)。
- b 山口大学埋蔵文化財資料館「吉田構内遺跡保存地区の発掘調査 (昭和59年度)」(『山口大学構内遺跡調査研究年報VI』、1987年)。

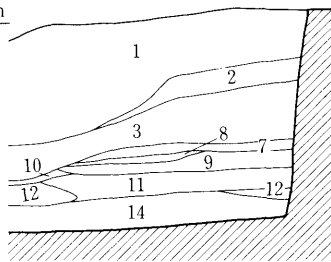
吉田構内経済学部校舎新営に伴う試掘調査

東壁

N 20.60m

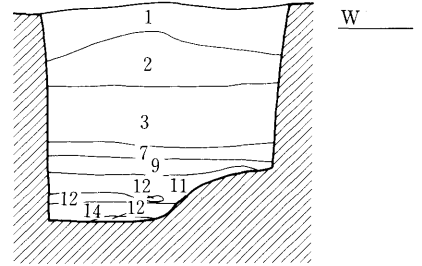


20.60m



南壁

E 20.60m



0

4m

- | | | | | |
|----------|--------------|----------|-----------|---------------|
| 1 表土 | 4 茶褐色粘質土 | 7 暗褐色粘質土 | 10 黄褐色砂質土 | 13 灰褐色礫混じり砂質土 |
| 2 旧水田耕作土 | 4 淡褐色礫混じり砂質土 | 8 黒褐色粘質土 | 11 黄褐色シルト | 14 砂 |
| 3 旧水田床土 | 6 淡褐色砂質土 | 9 灰色砂質土 | 12 砂礫 | |

Fig. 66 Bトレンチ土層断面実測図

c 山口大学埋蔵文化財資料館「吉田構内遺跡保存地区の発掘調査（昭和60・61年度）」（『山口大学構内遺跡調査研究年報VIII』、1989年）。

2) a 山口大学埋蔵文化財資料館「経済学部環境整備に伴う立会調査」（『山口大学構内遺跡調査研究年報V』、1986年）。

b 山口大学埋蔵文化財資料館「防火用水配管布設に伴う立会調査」（『山口大学構内遺跡調査研究年報IX』、1991年）。

第 2 節 吉田構内農学部農業環境観測実験施設新営に伴う発掘調査

1 調査の経過

新営予定地は吉田構内の中央部からやや東に位置する。西方約85mに所在する第二学生食堂敷地では古墳時代前期の竪穴住居跡6棟が検出されている。距離的にも極めて近接した位置関係にあることから、当初から新営予定地内にも集落関連遺構が分布する可能性が考えられた。新営建物の面積は約50m²と小規模であること、また、周辺での遺構・遺物の分布状況が極めて濃密であることなどから、当初から新営予定地全面について発掘調査を行った。

調査は人文学部考古学研究室の協力を得、昭和56年1月19日から2月2日まで行った。その結果、東端部では南北に溝状の攪乱が認められたが、7～8世紀代のものと思われる土壌5基、溝3条を検出した。

2 層位 (Fig. 68)

地表面の標高は約23.3mで、調査区全域にわたってほぼ平坦に造成されている。土層の堆積層順は極めて単純で、構内造成による埋め土は地表面から約20～40cm下位までで、その下には攪乱土である第2層：灰褐色土が客土されている。層厚は調査区の南西部ではわずかに10～15cmであるが、東部では最大50cmにわたって堆積する。その供給源は調査地域よりやや高所に位置する、西側の農学部害虫学実験畑付近と考えられる。第2層からは土師器、須恵器、瓦質土器、陶器、磁器、寛永通宝など約130点が出土したが、須恵器がその大半を占める。南西部では第2層の下位に旧水田耕作土が残存し、南西方向への地山の落ち込み部分には、最大層厚20cmの第4層：暗褐色粘質土が堆積する。同層は遺物を包含しておらず、自然堆積と思われる。南西部以外では第2層の直下が黄褐色粘土の地山である。地山の検出面の標高は約22.5～22.7mで、調査区西側が若干低い。



Fig. 67 調査区位置図

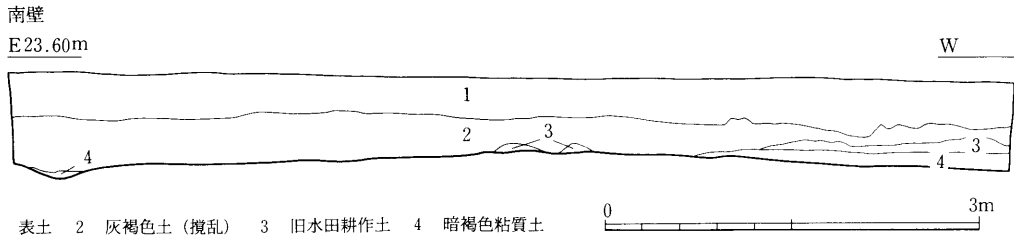


Fig. 68 土層断面実測図

3 遺構

土壇

第1号土壇(Fig.70,PL.37(2))

調査区の北西部に位置するが、北への延長部分は調査区外にあたるため完掘していない。平面形態は円形もしくは楕円形を呈するものと思われ、長軸120cm以上、短軸67cm以上の規模をもつ。土壇の南北部分には、検出面から15cm下位に平坦面をもち、中央部分は壇底まで平坦面から播鉢状にさらに22cm落ち込んでいる。埋積土は4層に分層され、

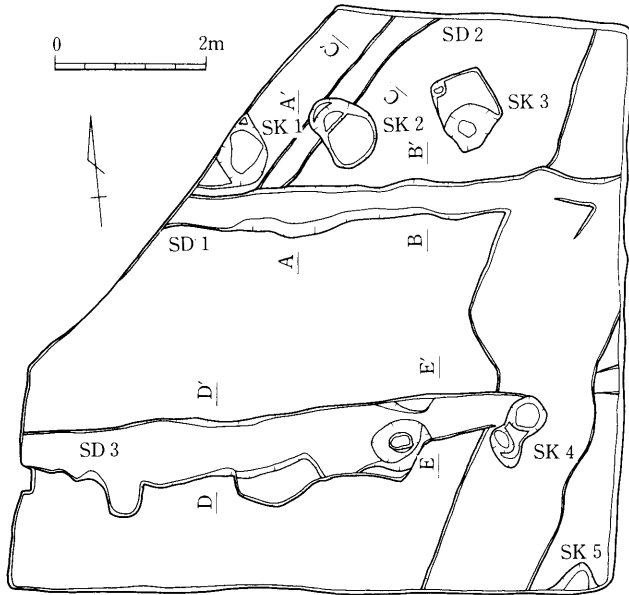


Fig. 69 遺構配置図

土壇底よりやや上位には、結晶片岩を主体とする10~15cmの自然石が投棄されている。検出面の標高は約22.7m。遺物は南部の平坦面からやや上位に堆積する、第3層：灰褐色粘質土から須恵器の坏蓋1点が出土した。7世紀前半。

第2号土壇 (Fig. 71,PL. 37 (3))

第1号土壇のすぐ東側に並列して位置し、第1号溝を切っている。平面形態は楕円形で、長軸100cm、短軸74cmの規模をもつ。検出面からの深さは35cmで、北端部では壇底から15cm上位にせまい平坦面をもつ。南端部では壇底からやや上位に、投棄によると思われる自然石の集石が存在する。埋積土は6層に分層されるが、出土遺物はない。検出面の標高は約22.7m。第1号土壇との位置関係、自然石の集石などから、第1号土壇と同時期のものと考えられる。

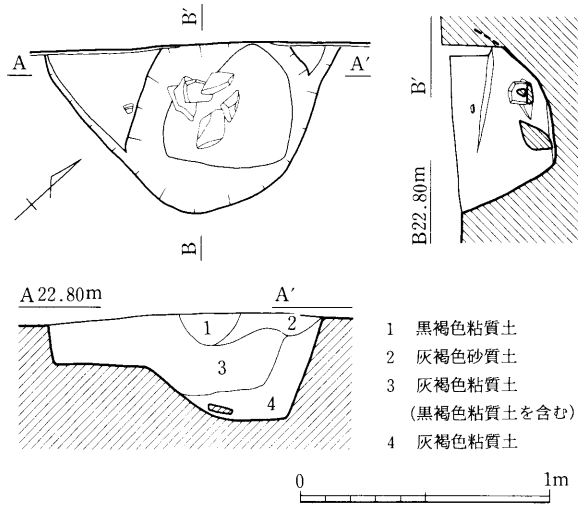


Fig. 70 第1号土坑実測図

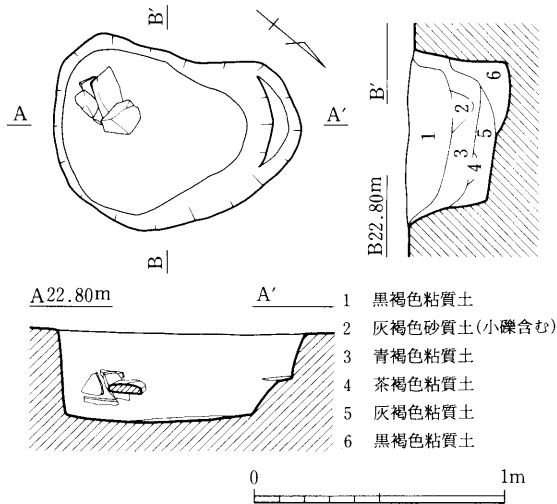


Fig. 71 第2号土坑実測図

第3号土坑(Fig. 72, PL. 37(4))

調査区の北端中央部、第2号土坑のすぐ東側に位置し、第1・2号土坑と並列して存在する。平面形態は五角形状を呈し、長軸102cm、短軸80cmの規模をもつ。坑底は南半部が大きく落ち込み、検出面からの深さは45cmである。北半部ではそれより35cm上位に平坦面をもつ。検出面の標高は約22.8m。埋積土は暗褐色粘質土で、須恵器、土師器、陶器が出土したが、陶器は後世の流入であろう。第1・2号土坑との位置関係、出土遺物などから、第1・2号土坑と同時期のものと考えられる。

第4号土坑(Fig. 73, PL. 38(1))

調査区の南東部に位置する。第3号溝と切り合い関係にあるが、先後関係は明らかにできなかった。平面形態は不整楕円形で、長軸96cm、短軸36cmの規模をもつ。中央部付近には検出面から25cm下位に平坦面をもつが、北東部および南西部ではこの平坦面から若干落ち込む。坑底は最深部で検出面から34cmである。検出面の標高は約22.6m。埋積土は3層に分層され、上層の灰褐色粘質土および中層の灰色砂質土から須恵器、土師器若干が出土した。7～8世紀のものと考えられる。

第5号土坑 (Fig. 74, PL. 38 (2))

調査区の南東端部に位置するが、南への延長部分は調査区外にあたるため完掘していない。平面形態は円形系統で、長軸70cm、短軸36cm以上の規模をもつ。坑底は平坦で検出面

からの深さは11cmである。埋積土は暗褐色粘質土で、検出面の標高は約22.6m。内部からの出土遺物はない。時期不明。

溝

第1号溝 (Fig. 69・75, PL. 37 (1))

調査区の北部を直線的に東-西に走行する溝で、東端部付近は後世の溝状の攪乱によって一部消失している。検出長は約6.2mで、溝幅は45~65cm、平均約50cmである。検出面からの深さは東部で5~8cm、西部で15~18cmである。検出面の標高は約22.7m。埋積土は上位から黄色粘質土、黄灰色砂質土の2層に分層されるが、上層の黄色粘質土は部分的に堆積するにすぎない。遺物は下層の黄灰色砂質土から須恵器、陶器小片若干が出土した。

第2号溝 (Fig. 69・75, PL. 37 (1))

調査区の北西部を直線的に北東-南西に走行する溝で、第1号溝に切られている。第1号溝以南への延長部分は削平によって消失している。検出長は約3.3m、溝幅は30~35cmで、検出面からの深さは5cmである。検出面の標高は約22.7m。埋積土は黄色粘質土で、内部からの出土遺物はない。

第3号溝 (Fig. 69・75, PL. 37 (1)・38 (3) (4))

調査区の南部を直線的に東-西に走行する溝で、東端部付近は後世の溝状の攪乱によって一部消失している。検出長は約8.1mで、南側の肩部では部分的な張り出しが3ヶ所に認められる。溝幅は最大の中央部で約90cm、平均50~60cmである。検出面からの深さは調査区西側の削平が東側に比べて少ないため、東部で10cm、西部で20cmである。検出面の標高

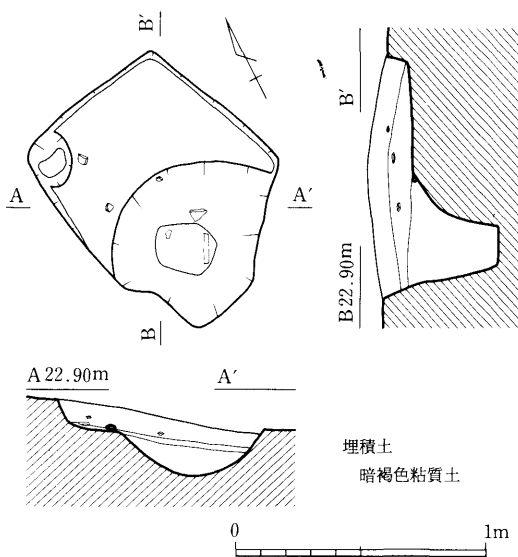


Fig. 72 第3号土壌実測図

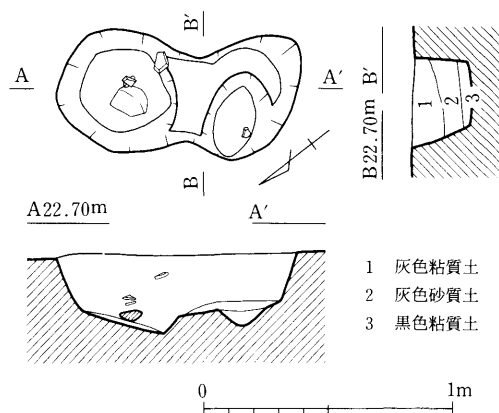


Fig. 73 第4号土壌実測図

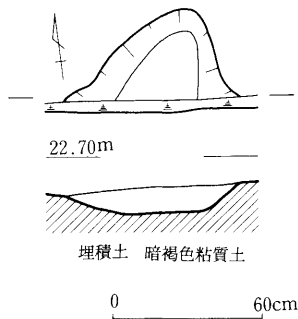


Fig. 74 第5号土坑実測図

は東部で約22.6m、西部で約22.7mである。埋積土は黄灰色粘質土で、内部から弥生土器、土師器、須恵器などが出土した。7世紀初頭。

4 出土遺物 (Fig. 76・77, PL. 39)

第1号土坑出土遺物 (1)

須恵器の坏蓋。口縁部内面には短いかえりをもつが、口縁端部より下方へは延びない。第3層：灰褐色粘質土出土。

第3号溝出土遺物 (2～4)

2～4とも須恵器。2・3は坏蓋で体部から口縁部まで緩やかに移行しながら開く。2は口縁端部がわずかに外反する。4は短頸壺の蓋と思われる。口縁部はわずかに外反し、端部内面には面取りぎみの面をもつ。端部は尖る。

第2層出土遺物 (5～24・Fig. 77)

5～24とも須恵器。5～9は坏蓋。5・6は口縁部内面にかえりをもたないもの。5は外面の体部と口縁部の境に退化した不明瞭な段をもつ。口縁端部内面には面取りぎみの面をもち、端部は尖る。6は体部から口縁部まで緩やかに移行する。7～9は口縁部内面にかえりをもつもの。7・9はかえりの位置が口縁端部付近にあるもので、7はかえりが口縁端部より下方に延び、端部は尖る。9はかえりが口縁端部より下方に延びず、端部は丸く終わる。8はかえりが口縁端部からやや離れてあるもので、短いかえりが垂直ぎみに下方に延びる。10～19は坏身。10～14は高台をもたないもので、11は底部と体部との境が不明瞭。13は内面の底部と体部の境にヘラによる沈線が巡る。15～19は高台をもつもの。17は不明であるが、他はいずれも底部と体部の境より内側に高台を貼付し、高台は外方に「ハ」の字に開く。18は端部内面にかえりをもつ。20・21は壺。20は外弯しながら外反する口縁部で、端部内面は強い横ナゲにより窪む。21は体部が底部から緩やかに立ち上がる。22は短

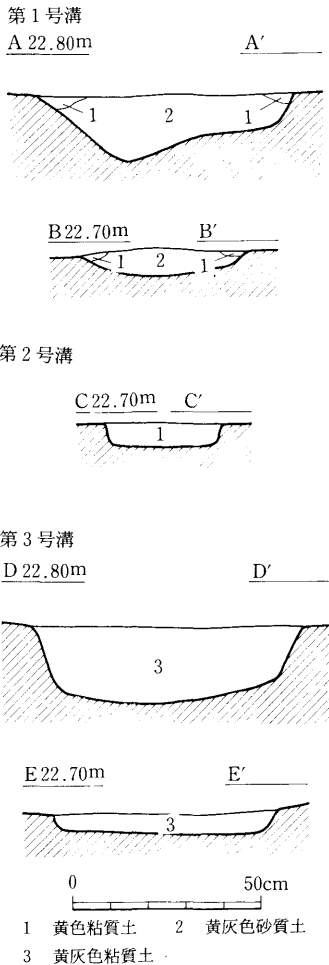


Fig. 75 溝土層断面実測図

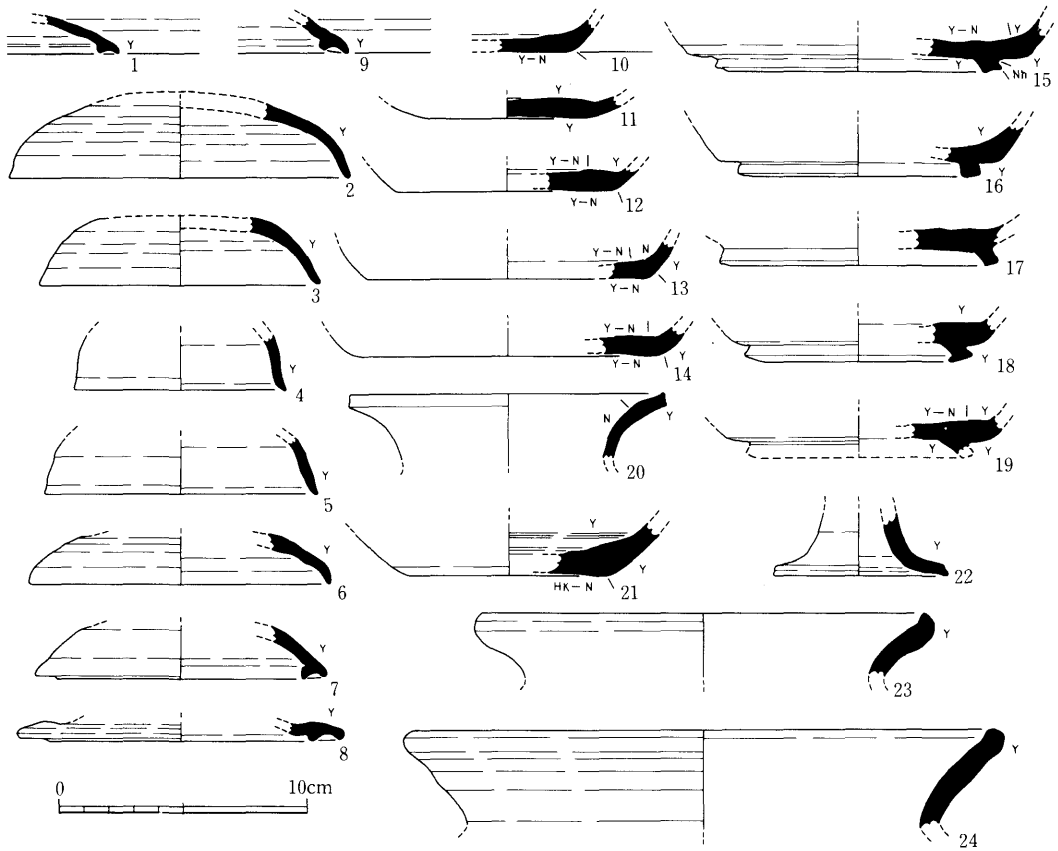


Fig. 76 出土遺物実測図

脚の高坏の脚部で、裾端部は鳥嘴状を呈する。23・24は甕の口縁部。23は口縁端部付近がわずかに肥厚し、内弯して立ち上がる。24は直線的に開く口縁部をもち、端部は内弯ぎみに立ち上がる。

出土した須恵器は7～8世紀代におさまる。

5 小結

今回検出した遺構は土壇5基、溝3条である。土壇のうち、第1～3号土壇の3基は一定の間隔をおいて北東－南西に並列する。長軸方向もほぼ同一で、第1・2号土壇のように内部に集石をもつなど共通する点が多いことなどから、第2・3号土壇も第1号土壇同様、7世紀前半のものと考えられる。溝は東－西および北東－南西に走行する。前者は第1・3号溝で、調査区の東方に位置する東から西へ開く谷、後者は第2号溝で、調査区の

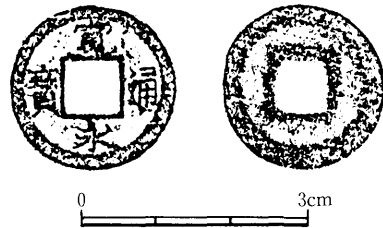


Fig. 77 出土銭貨拓影

昭和55年度山口大学構内の発掘調査

Tab. 5 出土遺物観察表

法量()は復原値

番号	器種	法量(cm) (①口径②底径③器高)	色調 (①外面 ②内面)	胎土	焼成	備考
第1号土壌						
1	須恵器 坏蓋		明青灰色(5B7/1)	良好	良好	
第3号溝						
2	須恵器 坏蓋	①(13.8)	①青灰色(5B6/1) ②明青灰色(5B7/1)	良好	良好	
3	須恵器 坏蓋	①(11.4)	明青灰色(5B7/1)	精良	良好	
4	須恵器 短頸壺蓋	①(8.6)	明青灰色(5PB7/1)	精良	堅緻	
第2層(攪乱層)						
5	須恵器 短頸壺蓋	①(11.0)	青灰色(5B6/1)	良好	堅緻	
6	須恵器 坏蓋	①(12.2)	①灰白色(N7/1) ②灰色(N6/1)	精良	堅緻	
7	須恵器 坏蓋	①(10.0)	明青灰色(5PB7/1)	不良	堅緻	
8	須恵器 坏蓋	①(10.6)	①青灰色(5B6/1) ②明青灰色(5B7/1)	良好	良好	
9	須恵器 坏蓋		明青灰色(5B7/1)	精良	堅緻	
10	須恵器 坏身		灰白色(N8/1)	やや不良	良好	
11	須恵器 坏身	②(5.8)	明青灰色(5B7/1)	精良	不良	
12	須恵器 坏身	②(8.6)	①青灰色(5B6/1) ②明青灰色(5B7/1)	良好	良好	
13	須恵器 坏身	②(11.2)	明青灰色(5B7/1)	不良	良好	
14	須恵器 坏身	②(11.6)	①青灰色(5B6/1) ②明青灰色(5B7/1)	やや不良	やや不良	
15	須恵器 坏身	②(10.2)	①青灰色(5B6/1) ②明青灰色(5B7/1)	精良	堅緻	
16	須恵器 坏身	②(8.4)	①明青灰色(10BG7/1) ②灰白色(5Y8/1)	精良	不良	
17	須恵器 坏身	②(10.4)	明青灰色(5PB7/1)	精良	やや不良	
18	須恵器 坏身	②(7.4)	青灰色(5B6/1)	良好	堅緻	
19	須恵器 坏身		①明青灰色(5B7/1) ②青灰色(5B6/1)	精良	良好	
20	須恵器 壺	①(12.6)	青灰色(5B6/1)	精良	堅緻	
21	須恵器 壺	②(8.0)	①青灰色(5PB5/1) ②青灰色(5PB6/1)	不良	堅緻	
22	須恵器 高坏	②(7.0)	①灰色(N6/1) ②青灰色(5B6/1)	やや不良	堅緻	
23	須恵器 甕	①(18.0)	明青灰色(5BG7/1)	精良	堅緻	内外面自然釉
24	須恵器 甕	①(23.2)	①青灰色(5B6/1) ②明青灰色(5B7/1)	不良	良好	

北方に位置する北東から南西に開く谷の各々の落ち込みに対応して掘削されたものである。切り会い関係から前者のほうが新しく、第3号溝は7世紀初頭の時期が与えられる。

遺物がまとまって出土したのは、地山の直上に客土されている第2層：灰褐色土で、出土遺物の大半は7～8世紀代の須恵器である。今回の調査区周辺でも過去に同時期の須恵器が採集されており、周辺¹⁾に古代の集落関連遺構が分布している可能性が高い。

[注] 1) 山口大学埋蔵文化財資料館「吉田構内汚水排水管等総改修に伴う立会調査」(『山口大学構内遺跡調査研究年報VII』、1987年)。

第3節 昭和55年度山口大学構内の立会調査

1 吉田構内本部環境整備に伴う立会調査

調査地区 吉田構内 E・F-15・16、F-20・21、G・H-12・19

調査期間 昭和56年3月10・16日

調査方法 工事施工時における立会調査

調査面積 1815m²

調査結果 調査地域は吉田構内の北東端部に位置するサークル棟東方の地点（第1地点）、西端部のプール敷地（第2地点）、南西端部のラグビー場（第3地点）の3地域に分散する。第1地点は門衛所から西に分岐する汚水排水管の埋設、第2地点はプール周囲の舗装に伴うものがある。前者は幅約60cm、長さ25mの工事路線について地表面から50cm、後者は20cmの掘削を行ったが、両地点とも構内造成による埋め土であった。第3地点はラグビー場のポール移設に伴い、地表面から約80～90cmの掘削を4ヶ所行うものである。B・C両地点では地表面から20cm下位で旧水田耕作土が認められ、その下に旧水田床土が残存する。その下は青灰色粘土の地山で、地表面から約50cm下位で検出された。A・D両地点では旧水田耕作土、旧水田床土の下位に弥生土器を含む黒褐色粘質土が堆積する。検出面の高さはB・C地点と大差なく、層厚は少なくとも30cm以上ある。出土遺物がなく時期はわからないが、B・C地点の土層の堆積状況から遺構の埋積土である可能性が高い。

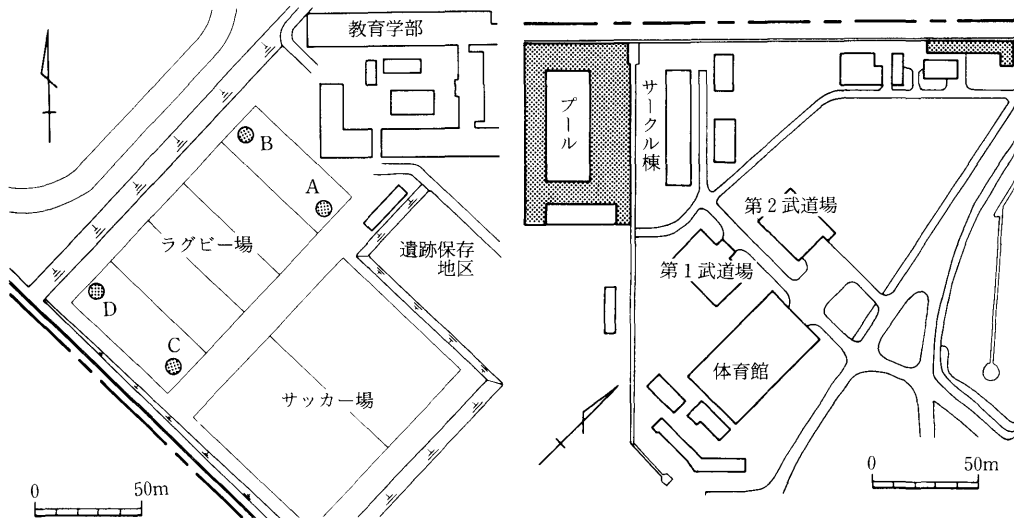


Fig. 78 調査区位置図

2 吉田構内農学部環境整備に伴う立会調査

調査地区 吉田構内 L・M-12・13、N・O・P-10~12、P・Q-17・18

調査期間 昭和56年3月12・24日

調査方法 工事施工時における立会調査

調査面積 135m²

調査結果 工事内容は吉田構内の北部に位置する飼料園での暗渠排水溝の掘削、および農学部解剖実習棟周辺での汚水排水管の埋設である。前者の掘削は地表面から約60~70cm下位までで、2地点について行われた。循環道路以東の地域は幅60cm、長さ160mの掘削規模である。耕作土、構内造成に伴う埋め土は地表面から50~60cm下位までで、その直下は南半部では黄褐色粘質土の地山、北半部では北から南へ延びる丘陵の岩盤であった。なお、南端部では地表面から65cm下位で、黒色粘質土を埋積土とする柱穴1個を検出した。埋積土の色調から弥生~古墳時代のものと思われるが、出土遺物がなく時期は不明。循環道路以西の地域は幅60cm、長さ38mの掘削である。層厚20~30cmの耕作土の下位には、上位から層厚10~20cmの暗褐色粘質土、層厚約20cmの黒褐色粘質土の2層の遺物包含層が堆積する。両層とも微細な弥生土器、土師器を包含する。なお、工事基底面では地山は検出できなかった。後者は解剖実習棟の東西両側の2地点について立会調査を行った。両地点とも地表面から80~90cmまで構内造成による埋め土で、その直下がグライ度の高い青灰色粘土の地山であった。遺構は認められなかった。

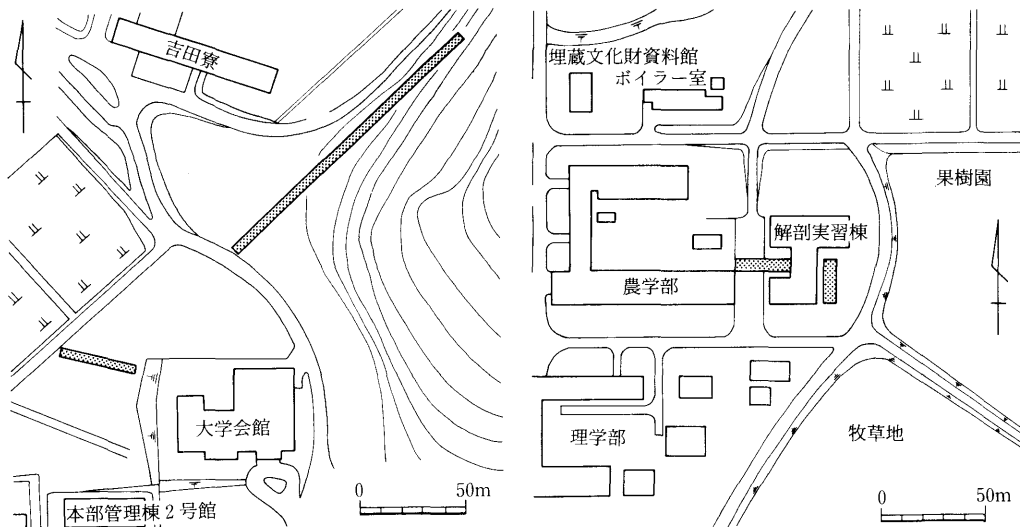
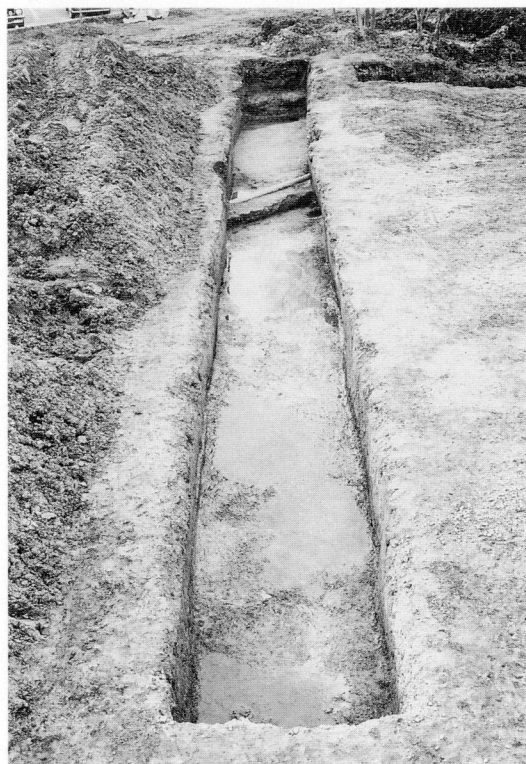


Fig. 79 調査区位置図



(1) 調査前全景 (東から)



(2) Aトレンチ全景 (東から)



(3) Bトレンチ全景 (北から)

吉田権内経済字部校舎新営に伴う試掘調査 (2)



(1) Aトレンチ南壁東端部土層断面(北から)



(2) Aトレンチ南壁中央部土層断面(北から)



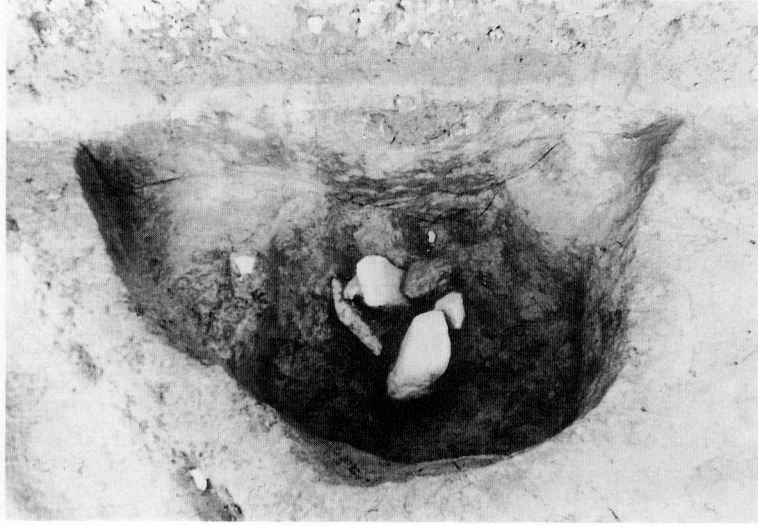
(3) Aトレンチ南壁西端部土層断面(北から)



(4) Bトレンチ南壁土層断面(北から)

(1) 吉田構内農学部農業環境観測実験施設新宮に伴う発掘調査

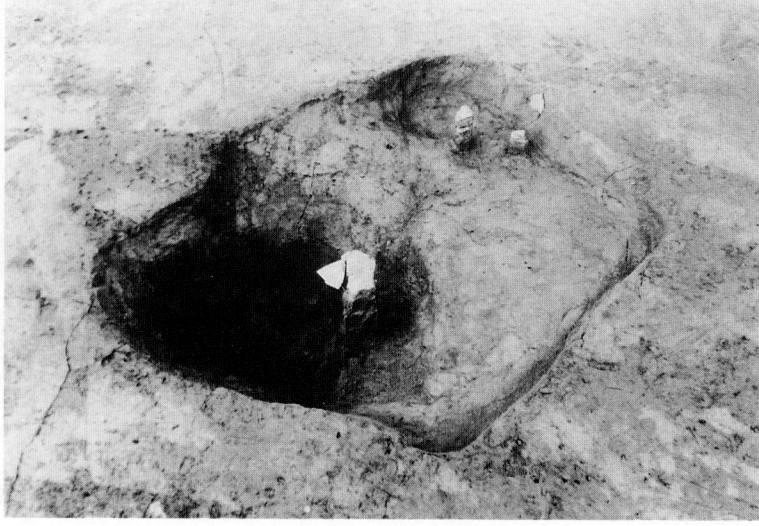
(2) 第1号土壙(南東から)



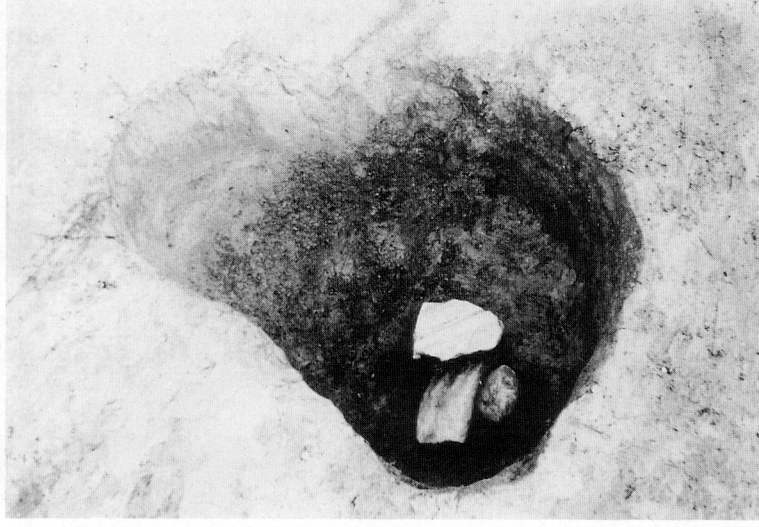
(1) 調査区全景(東から)



(4) 第3号土壙(南東から)



(3) 第2号土壙(南西から)

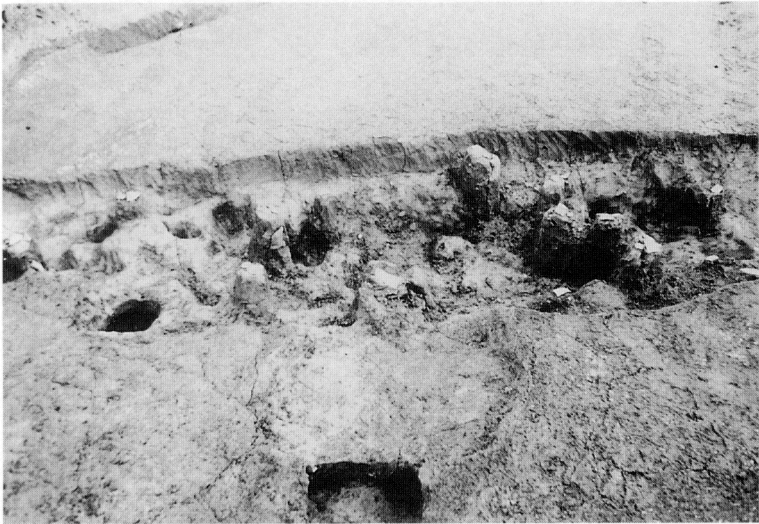




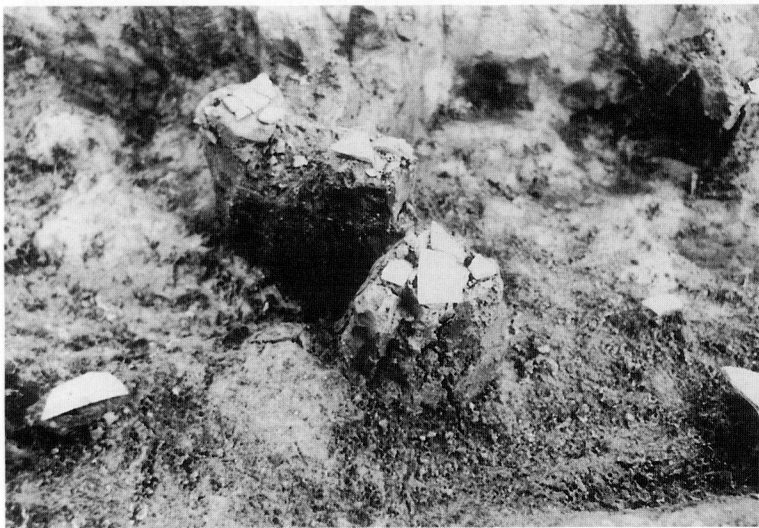
(1) 第4号土壙(北西から)



(2) 第5号土壙(北から)



(3) 第3号溝遺物出土状況(1)(南から)

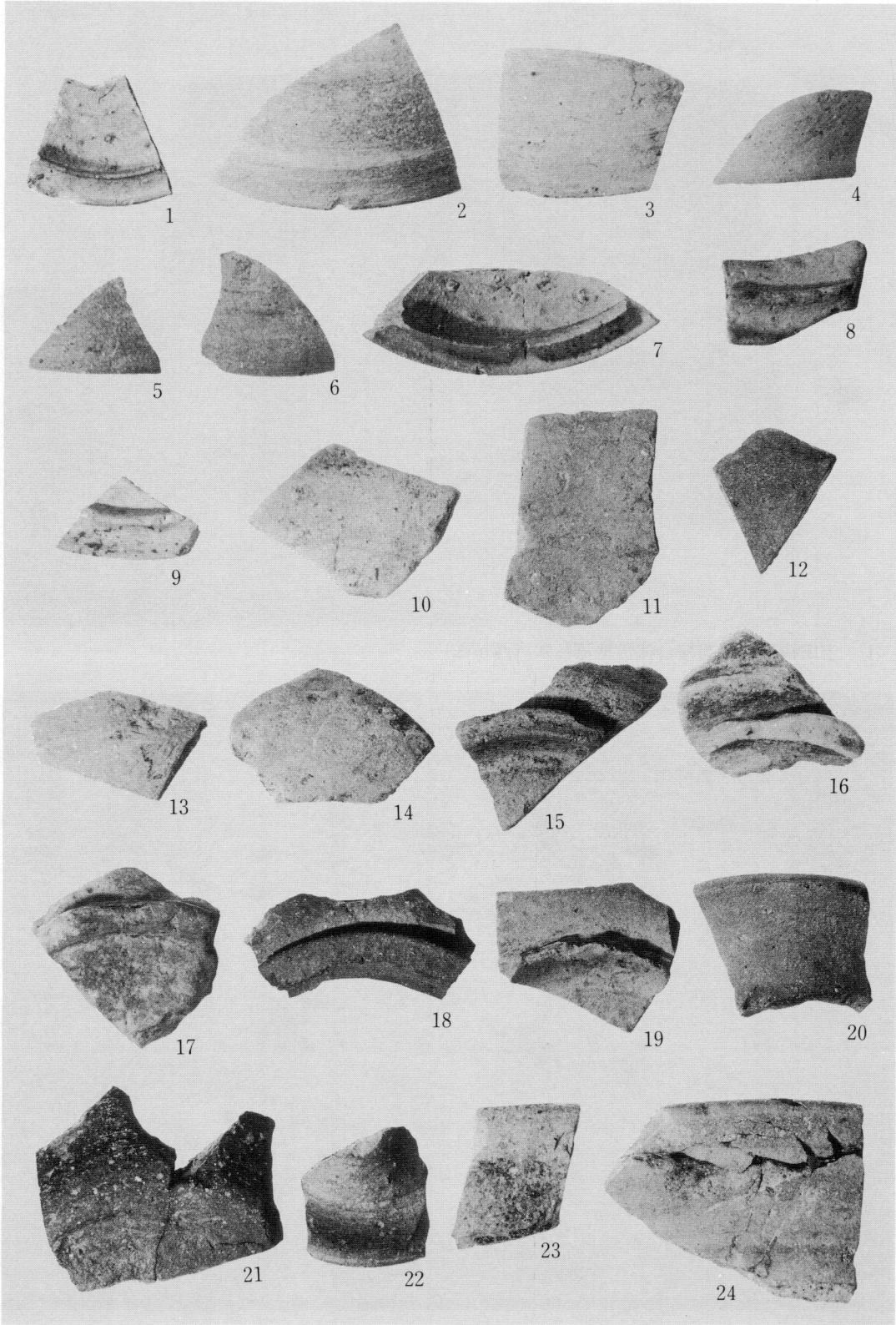


(4) 第3号溝遺物出土状況(2)(南から)

吉田構内農字部農業環境観測実験施設新営に伴う発掘調査

(2)

吉田構内農学部農業環境観測実験施設新宮に伴う発掘調査 (3)



出土遺物

(3) 吉田構内農学部農業環境観測実験施設新宮に伴う発掘調査